

[日刊工業新聞 2010 年 2 月 5 日号]

「磁化水」計測に成功 名古屋産業科学研・先端医療振興財団 高感度センサー開発 存在確認、理論確立へ

名古屋産業科学研究所と先端医療振興財団（神戸市中央区）は共同で、水を磁化した「磁化水」を作り、独自開発の磁気センサーで磁化現象を計測することに成功した。科学的に不確かだった磁化水の存在を確かめたことで、磁気現象の理解が進む。また、洗浄力を高める洗濯水や健康を増進する飲用水など、磁化水の活用も期待される。

洗濯水への活用も

同研究所の毛利佳年雄上席研究員（名古屋大学名誉教授）と同財団の福島雅典臨床研究情報センター研究チームは、数ピコテスラ（ピコは 1 兆分の 1）の磁界を検出できる高感度の磁気センサーを開発した。水道水に 1 時間以上低周波の磁界をかけた水を、センサーで振り子のように振動させた。その結果、約 2.3 ピコテスラの磁界を検出、この水が「磁化水」であることを確かめた。磁化水を計測したのは世界で初めてという。

チームは、2001 年から水が磁化する仕組みの理論脆化に取り組み、低周波の磁界で水が磁化され、プロトンが活性化するという「磁気プロトニクス原理」を提唱。今回の成果で、この原理が証明されたとみている。

水が磁化する可能性は気功と関係し、血行促進による健康増進や、病気の治療などの効果が中国を中心に論じられてきた。しかし、水が磁化する理論はまだ確立していない。従来、核磁気共鳴（NMR）法などで試みられたものの、これまで磁化を検出した例はなく、磁化水の存在は疑問視されてきたという。

成果は電磁波国際会議「PIERS」が発行する論文集の電子版で発表した。3 月 22 日から中国の西安で開かれる「PIERS 2010」で詳細を講演する。